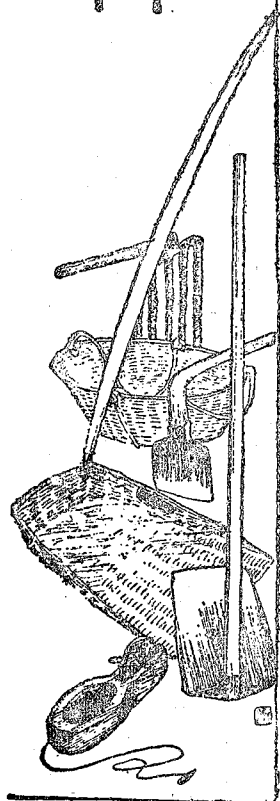


史料



五十年前の
道路改良家

天爵大神水谷忠厚

山田英太郎

余が少時、舊藩尾州侯の世臣に水谷忠厚と云へる奇傑あり、自ら號して天爵大神と稱す、道路の改良橋梁の架設を以て己れの任とし、陶郷瀬戸町の西方なる峻坂こぼれ今坂こぼれと稱する長峽路を削平したると名古屋市の東北郊外を環流する矢田川庄内川上流の一支流也に六百尺餘の長橋を架設したるとを發端として十有餘年の間暫くも寧處せず、遂に尾三、濃、信及び上越の諸州に涉りて道路の開鑿と修理とを竣成せるもの、無慮六十里を算するに至り、明治十年乃至二十年の比には名聲藉甚、盛に一世の驚異と稱

讚とを博せり。

余が天爵に於ける年齒素と壯少の大差あり、之を先輩と云はんよりは寧ろ父執を以て視るの實際なりしも、亦夙に其人に親炙して其言行の一端を耳聞目睹せしが、其の初めて輓車を業とし日々に瀬戸の陶磁器を大八車當年の大八車は車輪の直徑五尺内外なりに滿載して之を名古屋に搬運する也、大型の提灯を作りて之を車轆に附し其の前面に題して「横行天下者、唯力―食の八字を大書し、背面、別に簡勁なる小品文を細書したり、細書の全文は惜むらくはモハヤ記憶に存せざれども、晴則侶車雨亦不負車」と云ふ調子の名文たりし文は今尙眼前に髣髴たるものあり。

天爵の輪輓に従ふや、遷路空車を挽くに慊あきららず、乃ち更に青物市の第一場たる枇杷島に到りて野菜を滿載し來り、之を瀬戸に輸おこすを常とせり、瀬戸の地たる素と山阿礪礪耕耘に可ならず、加ふるに全町窯工を業とし最も菜蔬に乏し、故を以て居民特に其勞を徳とせりと云ふ。

天爵が初め今坂の削平に志し、又矢田川の架橋を企てたるもの、皆是自家車の艱苦を體驗したるに出るや、固より言を待たず、則ち其輓車の業を擇びたるもの、實に其の道路改良家たるの素地を爲したるは勿論なれども、其の人と爲り、固と尋常一様の武辨にあらず、嘗て春日潛庵其他に従ひ相當講學の力あり、陽明派の學徒として知行合一、躬行實踐に徹底するに藉るもの、亦眞に掩ふべからず。天爵の素質材幹已に此の如くなるが上、今坂工事の劈頭早くも一大幸運の來り寵するに會せしは時の參議中將山田顯義との奇遇にてありける、維時明治十一年北陸東海御巡幸の典あり、秋十月車駕岐阜縣より愛知縣に向はせらる、山田參議、供奉の列に在り名古屋に先着して官民奉迎の準備

を視察せんとし途を濃州多治美より瀬戸に通ずるの間に取り、隨員若干と舫車を聯ねて今坂の現場を過ぎらんとす、天爵方さに錘を揮て工事に餘念なし、首を回らして大喝聯車を誰何し、榜標を指示して每人土壤一荷を擔運すべきを命ぜり、顧みれば坂側に高札あり、通行者賦役の法則を掲けり、而かも隨員は逆さまに天爵を叱して行客の高官たる旨を説く、天爵肯せず、聲雷の如し、參議車上より路傍なる大八車の提灯の文字を讀みて、天爵の凡物に非ざるを察し、徐に降て天爵を延見し、溫顔慰諭、工事の由來を訊て心に首肯する所あり、車夫を麾きて高札通りの力役に從はしめ、悠揚として名古屋なる旅館一説に辯護士友松芳範の舞鶴の邸と傳へ同邸今猶空齋當年の揮毫に成る額額を掲ぐと云ふに再會を約して去る、天爵乃ち翌日を以て參議を其館に訪ひ、具さに披瀝する所あり、參議其眞率を喜び、懇密に之を待遇し、驩然對晤す、其狀舊友の相會するが如く、侍者をして啞然たらしむ、是より後參議の天爵に於ける厚誼、臻らざるなく、遂に其東京飯田町の邸を許して、天爵常寓の所と爲すに至り、又遍く天爵を貴顯紳の間に紹介して、其交遊を廣ふし、以て其道路工事を聲援するに努めり、ソレカアラヌカ天爵が工を擧ぐるの所、到處天爵大神と大書し、乃至は「至誠勸天地、陽氣發處金石亦透精神」一到底事不成等の頌文、讚句を大書したる旗幟の林立を見ざるはなく、宛然として村社の祭禮に詣るの觀あり、而して之が筆者を檢すれば、曰く有栖川親王殿下曰く三條相國曰く岩倉右府曰く山田空齋曰く伊藤春畝曰く杉聽兩曰く誰曰く誰と皆當世の巨公名卿にあらざるはなし、天爵が之によりて人の敬慕と信用とを進め、事業の進捗に裨補したるもの、尠少にあらず、深く參議を徳としたりと云ふ。

余少にして如上水谷氏の片鱗を窺ひたれども居ること未だ幾ならずして、笈を負て郷關を出でた

る後は、人事紛々行路を異にし、空しく都門塵中に齷齪たるを以てして、遂に復た水谷氏の生前に邂逅の機なかりしのみならず、氏逝て今に三十九年、杳々として聞く所あらざりしが、今茲庚午一月二十三日、同郷の友人佐藤恒丸博士の偶々來り訪ふあり、其先考の遺篇を蒐集したりとて、錦山遺稿と題せる漢文本一冊を贈られたるを、繙くに及んで、端なくも水谷氏の全傳に逢着し、轉た今昔の感に堪へず、乃ち之を譯註して以て讀下に易くし、世に廣して以て五十年前の道路改良家を偲ばんと思ひ、浮ぶに付け、併せて余が知る所にして本傳の未だ載せざる逸事をも附加し、序引に代ふること此の如し。

因みに記す、本傳の筆者錦山氏は等しく名古屋の舊藩士にして、通稱を佐藤三藏と云ひ、水谷氏とは略同年輩の親友なりしなり、其學亦程朱餘姚の間に入出し、夙に四方に周遊して、師友を天下に求め、實用を旨とせる活人物たり、其嗣恒丸博士は帝大在學の往時業已に令名あり、陸軍に醫總監、赤十字病院長に歴任し、今や宮内省に待醫頭として、畏くも至尊皇室の醫務を董督しつゝあるは、世の周知する所の如し、嗚呼斯人にして、斯嗣あり、斯人にして、斯友あり、錦山氏の遺篇腐儒一輩の文と其撰を異にし、譯註して世に廣ふすべきもの、尠からず、又の械會に於てせん。

天爵大神の傳

天爵大神とは、吾が友水谷忠厚の自ら稱する所なり、忠厚、勢利に澹く、軒冕官爵を睹ること泥塗土の如し、而して惟た天爵を以て自ら樂む、蓋天爵は我が固有する所にして、人の寵辱予奪を受けず、其尊きこと以て加ふる蔑し、此れ其の名づくる所以ならん乎、忠厚、世々尾張侯に任ぶ、其學餘姚王陽明の學派を云ふ、陽明は浙江省餘

姚のを宗とし、躬行實踐を以て自ら勵まず、維新の際、尊王攘夷の説興る、忠厚亦之を力唱し、數々京師に入りて天下の形勢を視察す、將軍慶喜の大阪に敗るゝに方りてや、忠厚藩命を奉して東海道の諸藩に勤王を説く諸藩咸な命を聽く、明治四年詔を下して藩を廢す、忠厚因て世祿を奉還す、忠厚家素と貧、此に至て益々窮し、人の爲に車を輓く、尾州の東鄙に瀬戸邑あり、名古屋を距ること六里、其の陶器素より世に名あり、海外互市に迄り、輸出甚だ盛にして、其名古屋に轉送せらるゝ者、車馬相望む、忠厚亦日々に車を輓きて、其の間に往還す、而して名古屋の東に矢田川あり、砂磧茫漠、中に一條の流あり、水淺くして、揭涉衣を掲げ徒涉すすへし、然れども一旦霖雨あれば、則ち洪流暴漲、堤防決潰、行路者之を難む、又瀬戸の西に峻阪あり、長さ三百歩、羊腸嶮岨、車行甚だ難む、忠厚慨然として曰く、邦家富を致すの道は、連輻を便にするに在り、今不便此の如し、吾豈之を坐視するに忍びんやと、翌日直に峻阪に至り、獨り鑷きを揮て之を削平せんと欲す、人に値へば輒ち曰く、卿等盍そ邦家の爲に來て吾が勞を援けざるやと、聞く者皆之を嗤笑ふ、忠厚顧みず、日に益鑷を揮て、風雨を避けず、適一人其の至誠に感じて來り援くる者あり、忠厚大に喜び之を樹下に延き、爲めに忠孝の道を説く、遠近之を聞き、稍々來り集る、行人亦徒過するに忍びず、皆擔荷をを舍きて之を援く、是に於て工に就く者日々に數百人、六閱月にして遂に險を削りて夷となせり、乃ち日を卜して竣工式を擧ぐ、三條相公之を聞き、至誠動天地のの句を大帛に書して之を贈る、大教正本願寺大谷光尊も亦自ら六字の佛號を書し以て寄す、蓋古より門跡が親ら書する所の佛號を以て人に與ふるは、彼寺の重典たり、而して之を得る者は鈴木飛驒守、徳川東照公及び忠厚の三人のみ、忠厚之を得て高く竿頭に掲げ、相公の賜ふ所を併せて之を式場に樹つ、遠邇來り觀る者數千人なり、忠厚手に鑷を

執り、端然式場の中央に立ち、音吐期々、其の竣工を慶し、且衆人援助の勞を謝す、辭氣懇切、至誠面に溢る、衆感激して流涕膜拜掌を合せするものあり、天爵大神の名、遂に天下に聞ゆ、大神又橋を矢田川に架せんと欲し、芒鞋箬笠かわのかさを冠りの日に村落を巡り、戸ごとに説き人ごとに諭す、曰く、富者は財を施せ、貧者は力を施せと、而して手づから一錢だも受けず、富商豪農の名望あるものを擇て、其の出納を掌らしむ、資金已に豊なり、乃ち工を起し、大神躬ら督す、日ならずして成る、橋の長六十餘丈なり、神徳を謳歌するもの途に載つ、其他大神が開鑿する所の道路、三河美濃及び信濃に於て、凡そ十四里、越前に於て、凡そ二十里にして、其修理に屬するもの、尾張に於て、凡そ二十四里なり、而して、其の開鑿する所多く、窮山僻境に在り、大神黧面滿足かぎれのあし、備に艱難を嘗むること十餘年、而かも未だ會て絲毫の報を受けず、其の配熊澤氏、賢行あり、六男二女を生む、大神久しく外に在りて、家計に違あらず、母子幾んど凍餓せんとす、是に於て晝は則ち餓團を齧ぎ、夜は則ち紡織縫紉、傍ら井臼躬操井臼の古句あり、井は汲み臼をつきて藜菽を給する也、鞠育の勞に至るまで、一身之に當る、且夕の勤苦、人の堪へざる所にして、氏は之に處して、怨色なし、是を以て人皆愍て之を敬せり、日本鐵道會社、大神の公益を圖り、私利を忘るゝを聞き、書を寄せて曰く、本社軌道通ず、特に大神に許し、終身直ひを償はずして、乗車せしむと、日本郵船會社も亦之に倣ふ、大谷光尊書を贈て曰く、大神専ら國利に努め、衆生を濟度す、是れ我徒の感喜する所なり、大神登遐の日本寺大法會を行ひ、以て其徳に報せんと、東京の一富商來り、謁して曰く、願くば、太々神樂を献せん、大神曰く、何をか太々神樂と謂ふ、富商曰く、大神在世の中、若し神慮を慰せんと欲せば、僕便ち女樂を芳原に張り、以て大神の興を迎ふ可し、大神笑て曰く、吾人間の俗樂を好まず、然れども、汝が意に拂るに忍びずと、之を受く、而かも亦往

き遊ばず、大神交遊頗る廣く、上王侯貴族より下販夫牧豎に至るまで、苟も取る可きあれば、皆交を訂せり、大神身に絹布を着けず、儀容甚だ粗野なり、嘗て東京府廳に至る、曰く我是れ天爵大神なり、來て知事を見ると小吏調を典る者、叱して曰く世上詐ぞ天爵大神なる者あらんやと、大神目を瞋して曰く奴輩未だ我が名を聞かざる邪と、知事倉皇として親ら出て之を迎ふ、小吏錯愕鼠竄す、大神廣額巨眼、眞率にして邊幅を修めず、其の人と語るや、慷慨悲憤、而かも間ふるに、諛諛を以てす、且泣き且笑ふ、其聲四壁に震ふ、其名望を嫉む者は、或は以て病狂と爲し、或は以て詭激にして名を求むるものと爲す、而れども其の滿腔の赤誠に出づる者、終に没す可からざる也、吾大神と相知ること四十年、其の平生、奇行甚だ多し、大神今逝けり、因て其の尤も卓然たる者を採つて、以て世に傳ふ。

無礙子(錦山の別號)曰く至誠の人を感ずるも亦大なるかな、忠厚一寒士を以て足迹の至る、攸庶民子の如く來り、争て財を獻じ力を出し之が用たらんことを樂む、或は追慕已ます祠を立て之を祀るに至る、嗟乎公の勢位赫々として、理民に任ずる者、願みて季世薄俗の弊に勝へすとすものは、何ぞや。當世の政治家は已れ至誠に乏しくして民を理むること能はずとなり